

【研究ノート】

自由化する人間関係と他者との共通基盤の変容

——他者への信頼感を支える地域的要因に関するレビュー

NPO 法人 地域持続研究所 客員研究員
今井 隆太

1. 問題設定と構成

本研究の問いは、他者への信頼を支える、場所に関する要因とは何か、人に対する信頼と場所に対する意識・態度とはどのような関係か、である。文献レビューを通し明らかにする。

はじめに背景として、人間関係の選択化に伴う、見知らぬ他者との共通基盤である「社会」や「信頼感」の変容に関する指摘を検討する。次に、人間関係の選択化が本当に起きているのか、それに伴い、他者への想像力・信頼感などの共通基盤は本当に変容しているのか検討する。そして、信頼感に関する理論ならびに形成要因、および関連する変数として、居住地域に対する態度の理論ならびに形成要因に関する先行研究を整理する。

2. 背景

2-1 他者との関係に着目する意義

M.S. グラノヴェッターにより弱い紐帯の強さが指摘されて以来約 50 年が経つ (Granovetter 1973=2006)。人々のつながりは充実してきたのか。同じ社会に生きる人々はお互いをどのようにとらえるようになったのか。

今日の世界では分断や排外がしきりにテーマとなっている。各国では自国第一主義的な政治現象、またイギリスでは孤独対策担当大臣も話題となった (c.f. 西山隆行 2020; Putnam 2015=2017)。そのかなり前から、現代社会では、人々が自由に選択的に関係を構築できることになった反面、異質な他者に対して不

信や不安を持ちやすく、他者との共通の基盤となる社会を形成・想像しづらくなることが指摘されてきた (Bauman 2001=2008)。筆者もこれらを重要な課題であると考えている。

具体的な課題としては、第1に、都市化やICTにより、趣味や性質などの合う人々同士での関係作りが進むとすれば、本人の意思とは関係なく、選択されずに孤立する人々を生み出し、その一部の人々に社会的孤立¹という問題が集中して起きる可能性があること、第2に、社会的な要因によって孤立することは、個人にとっても心理的・健康的な負担を強いられること (稲葉陽二ほか編 2011)、異質な他者への不信・集団同士の不信が高まった場合は排外主義的傾向をもちうること² (金明秀 2015)、第3に、人々が他者への信頼を欠くことで、社会を支えるコストが増大すること (山岸俊男 1998) が指摘できる。

その他者一般への信頼感を含む社会関係資本は、多く蓄積することで、政治・経済・治安・人々の健康などに対して多くの効用をもたらすことには様々な分野から指摘されており、研究が進んでいるところでもある (Putnam 2000=2006; 稲葉ほか編 2011)。

2-2 社会関係・相互作用の意義

特に個人の心理に対して、その人がもつ社会関係は決定的に重要であり、単に社会政策上だけでなく、一般の人々の生活にとって極めて重要な問題となる。例えば、進化心理学・社会心理学の研究では、適切な社会的関係の維持・発展が、人間のもつ最も根源的な欲求のひとつと考えられている (Baumeister and Leary 1995)³。遠藤由美はそのような研究の展開をふまえ、「ヒトは霊長類としての出自故に、群で生きることを運命づけられており、社会的所属すなわち社会的ネットワークの中に位置を確保し他者と関わりあうことは、人間の至上課

¹ ここでいう社会的孤立は、社会関係の減少状態を指すものとする (孤独、孤立などの詳しい定義は河合ほか (2013) を参照)。

² 排外主義について、議論なく善悪を判断すべきではないが、本研究では議論を行う余裕はない。

題とでもいうべきものである」としている（遠藤 2006: 30）。

こうした見方を裏づけるように、相互作用やソーシャル・サポートの不足、相互作用の適正量、相互作用やサポートの過剰、それぞれに対人ストレスがあることが指摘されており（橋本剛 2003）、サポートを目的とした親密な働きかけは過剰と隣り合わせで、ストレス低減を主目的としない他者からの自然な働きかけ（コンパニオンシップ）は社会生活にとって欠かせないとされる（Rook 1987; 浦光博 1992; 2009）。仲間内以外との非意図的な接触の減少、あるいは社会的孤立は、各人の心理に対して大きな影響を与え得る。

そこで、本研究では、選択的で自由な人間関係が広がることで、他者への態度・共有する社会基盤への意識がどう変わっていくのか、を検討する。

3. 人間関係の選択化とそれに伴う相互不信は本当に起きているのか

異質な他者への不信というものは、本当に増大しているのだろうか。様々な他者への理解が進むことは考えられないのか。個々人が他者と関わりあうことを望んでも、社会構造の影響によって人間関係は変わってくる。例えば、冒頭で少し触れたが、都市では社会的孤立が問題化するという指摘は古くからなされ（Park [1925]1984=2011）、都市や地域という要因は、人間関係を考えるうえで大きな社会的要因となってきた。

たしかに、近年の量的調査では、社会的属性の違いなどを統制すると、都市度と社会的孤立の関係はほとんどなく、地域の都市度が高まると、選択的な趣味での同類結合が増える効果があることが示されている（赤枝尚樹 2015: 190）。加えて、同じ都市の中でも、時代を経るごとに趣味的同類結合が強まっている（赤枝 2018: 116）。全体としてみれば、都市度の上昇とつながりの数、社会的孤立の増加とは関係がない可能性が高いというのが、近年の都市社会学の重要

³ 他者との関係の対面性について、櫻井龍彦（2001）は社会学での研究はそれほど蓄積されていないとして理論的整理を行い、次のように指摘する。

「いかに非対面的関係性が拡大しようとも、そしてかつて対面的関係性が担っていた多くのものがいかに非対面的関係性によって代替されるようになっても、けっして埋めることのできない空隙が残る。」（桜井 2001: 209）

な知見である⁴。さらにウェルマン (Wellman 1979=2006) は、コミュニティが地域から解放されたとしても、それぞれの人間関係が島ごとに断片化されてしまうという見方に反論する。むしろ人間関係は外に開かれたものであり、いつでもだれとでも繋がれる社会になったというのである。一部地域の社会的ネットワークをたどる調査を行ったところ、完全に孤立した人はほとんどいなかったことも示されている。

3-1 選択的關係と非選択的關係

しかしながら、選択的な人間関係が主流となる社会では、人間関係の多寡は人によっては当然濃淡がうまれる。A. ギデンズは、ハイ・モダニティにおいて、安定した関係にある他者 (人格) への信頼が、「確固とした規範という決まりによって統制できない場合」には、「信頼は《勝ち取って》いかなければなら」ない、当事者個々人が「取り組む」問題となることを指摘する (Giddens 1990=1993: 151)。こうした「関係の自由選択化」には「孤立リスク」の拡大が付随し、「関係性から承認を得られる人、得られない人を明確に分断する可能性もある」(石田 2018: 81)。実際に、特に友人関係については、友人数について「持てる者」と「持たざる者」に二極化する傾向が指摘されている。

すでに多くの先行研究が示しているように、友人関係における階層的同質性の程度は、きわめて高い。……選択縁と呼ぼうが、趣味縁と呼ぼうが、その多くは階層的には同質的な属性をもつ人びとのネットワークである。しかもいまのところ、どの調査結果でも友人関係を関係財のなかで重視する者の比率は、高学歴の者に有意に高くあらわれている。関係を選択できる者とできない者がいる、これが現実の姿であり、将来においても、急激な変化はないものと想定できる。(森岡 1992: 24-25、強調は引用者)

⁴ 高田保馬の結合定量の法則の指摘や、ヒトが人間関係をもつ人数の目安を示した Dunbar 数の指摘とも整合的である (高田 [1922] 1971; Dunbar 1996=1998)。ただし、高田の基礎社会の摩耗という見方とは反している。

人間関係の選択的可能性の増大により、若年男性の友人関係は地理的に拡大し、遠距離の友人関係が増大した。しかし、その一方で、若年男性は近距離の友人関係を大幅に失い、結果として、友人関係全体でみても孤立率が増加した。……若年男性の友人関係の変化には非対称性があることにも注意がある。遠距離の友人関係は、主として平均値のみが増加し、これは極端に友人数が多い回答者の比率が増加したことを示唆している。一方、……多くの若年男性は近距離友人を減らしたのである。(石黒格 2018b: 65、強調は引用者)⁵

併せて石黒は、2つの地域での経年の量的調査による分析から、時代の変化によって人間関係の選択性が促進されても、選択的で親密な関係が増えるわけではないことを指摘する。男女や年齢を問わず「親密な友人関係が物理的に遠方に拡散」したことや「接触頻度が低下」したことを示し、地理的な距離の拡大が、非意図的な接触の減少による対面接触の減少を招いたことを示唆している(ただし、接触頻度の減少は過渡的な現象である可能性も示唆されている)(石黒 2018a: 89)。

まとめると、都市度の上昇(都市への人口集中)、あるいはコミュニケーションツールの変化等が起こるにつれ、非選択的な人間関係が選択的な人間関係に移ってきたことが示され、それ自体は弱いつながりが作りやすくなったという意味で肯定的に評価される。しかし一方で選択される人々と選択されない人々との断絶が生まれ、友人との非意図的な接触が減少した可能性がある。確かに全体として人々がもつ人間関係が減少したとはいえないが、その友人数の分布には偏りがあり、人によっては社会的孤立につながる恐れあることが指摘される。人間関係が、すべての人に開かれた関係に変化したとは決していえない。

⁵ ただし、赤枝(2015)が全国規模の調査データを用いているのに対し、石黒は2地域のデータであるため、日本全体の傾向であるとは言えず、あくまで示唆である。

3-2 同類結合と排他性

もともと日本社会においては、古くから同類的な人々の結合が内側に向かって閉じる傾向があることが繰り返し指摘されており（和辻哲郎 1935; 中根千枝 1967; 広井良典 2009）、ひとつの傍証として携帯メール利用による内閉性に対する影響の実証研究があるほか（小林哲郎・池田謙一 2007）⁶、日米において他者への一般的信頼感の通時的な低下（Putnam 2000=2006 :160-173; Wuthnow 2002=2013: 58; 坂本治也 2010: 9-11）⁷も示唆されている。

こうした視点から、都市化による人間関係の同類結合化に伴う、関係性や心理の質的な変化についても検討する余地がある。C.S. フィッシャーは、ウェルマンと同じく都市化によるコミュニティの喪失を実証的に批判した。ただし、フィッシャーは確かに親密な第1次的人間関係の減少に対して反証したものの、それに伴って他者一般への信頼が増すとは主張しておらず、むしろ同類的な関係の内側にあることで、一般的な不信感が増える可能性に言及している。具体的には、当時の「一般的な不信感」に関する統計をもとに、「都市住民は……自

⁶ 小林哲郎・池田は、東京都の高校生への量的調査と多変量解析に基づき、「携帯メール利用はパーソナル・ネットワークの同質性を高め異質性を低めることで、自らとは異なる考えや価値観を持っている他者に対する寛容性を低下させうる」ことを示している（小林哲郎・池田 2007: 92）。

⁷ 坂本は、統計数理研究所「日本人の国民性調査」をもとに、「一般的信頼感、1990年代後半以降の低下を示すデータもあれば、この30年間で一貫して向上していることを示すデータもある」が『日本人の国民性調査』への調査回答率の推移をみてみれば、調査が開始された当初は70～80%の高水準を記録していたが、1988年には61%に落ち込み、2000年代に入ってから50%台にまで低下していることがわかる。つまり、実際にとられた行動面からうかがえば、一般的信頼感や一般化された互酬性の規範はやはり90年代以降低下し続けているといえそうである」としている（坂本 2010: 9-11）。この点、猪口孝は、行動面を考慮していないため、一般的信頼感の上昇していると結論しているが、信頼の範囲が他国に比して狭いと考えられることも指摘している（Inoguchi 2002=2013: 339）。最近では、Jagodzinskiほか（2019）は信頼の範囲についても検討したうえで一般的信頼の上昇が継続していることを指摘しているが、稲垣・前田（2015）は同じ調査について、坂本と同様に回答率に課題があることを指摘している。猪口らの考察の傍証としては桜井政成（2020）があり、確かに近年は日本と他国との一般的信頼感の差がなくなっているものの、他国に比して、依然としてサポートやボランティアは地縁・見知った人々に対する行動に限られていることが指摘されている（桜井 2020）。

分の個人的世界の人びとには社会的に統合されているが、より広いコミュニティからはいくらか疎遠である」という (Fischer [1976]1984=1996: 239)⁸。

3-3 非意図的な接触の減少と空間

このような「関係の自由選択化」(石田 2018)や「内側に向かって閉じる」人間関係(広井 2009)と、地域との関連について、郊外や空間的特徴に関する指摘が多くある。アメリカにおいては、ジェイコブスやセネットが古くから郊外という地域や郊外家族の閉鎖性を指摘し (Jacobs 1961=2010; Sennet 1970=1975)、近年のゲートド・コミュニティは内側に向かって閉じるコミュニティの象徴的な例である。ヨーロッパでは、バウマンやデランティも都市中心部における、同質的なコミュニティの閉鎖性や排他性について言及している。

公共領域は、『守りやすい』包領……に縮められ、限られた者しか入ることができなくなる。共同生活について交渉が行われる代わりに、分離が図られる。差異を残していることが、犯罪的扱いを受ける。……〔引用者注：ゲートド・コミュニティの内と外の区別を念頭に〕よそ者(たんに「見知らぬ」者というのではなく、異邦人、つまりは「場違いな」者)の姿に、人々は、生活経験の全般を通じて感じている不確実性という恐怖の具体像を見出し、そのような像を熱心に追い求めては、喜んで受け入れる。ついには、自ら手を

⁸ 日本社会においては、赤枝が2003年の全国データをもとにした共時的な分析により、都市の人口集中度と社会的孤立あるいは他者一般への不信に対する都市効果を否定している(赤枝 2015: 166)。しかし、小藪は、一般的信頼感の標準的な質問では「たいていの人」という解釈に差が出る文言が含まれていることを批判し、「頼れる」人物の範囲を「信頼の範囲」として変数化し、都市規模との関係を再検討している。その結果、都市規模が大きくなるほど、信頼の範囲が狭まることを示し、フィッシャーの指摘と整合的である(小藪 2018: 52)。さらに赤枝も、2都市についての通時的な分析を行い、「1993年から2014年にかけて親密な友人の選択性が高まってきたと考えられるのではないだろうか。しかしながら、……各年齢層のあいだの溝や、趣味を共有していない他者とのあいだの溝が、2014年では相対的に深くなっている可能性を示唆しているともいえる」としており(赤枝 2018: 118)、日本においても都市化や時代変化によって内側に向かって閉じる傾向が増していることは否定できない。

汚すこともなく相手に打撃を与えることを、恥ずかしいと思わなくなる。
(Bauman 2001=2008: 158)

日本においてもセネットと同様の指摘がなされている。宮台真司 (1997)、吉見俊哉 (2009) は、特に郊外において、仲間意識の極小化、自分とは異なる他人・他者に対する社会的な感覚の喪失について言及している。

「郷に入りては郷に従え」ならびに「旅の恥はかき捨て」という共同体的な行動様式に変化はない。ところが「郊外化」のプロセスを経た結果、共同体ないし仲間意識の範囲が極小かつ偶発的になり、あるいは家・学校・地域を超出した「第四空間」に流れ出ることで、教室の中も街の中も、単なる「風景」として他人ばかりになった。その結果、パンツを売ろうが体を売ろうが恥ずかしくない女子中学生たちが出てきたのである。(宮台 1997: 148-149)

高度成長を経て、日本各地に広大な郊外が広がり、無数のニュータウンに林立する無数の「演技するハコ」に人々の人生が閉じ込められていくなかで生じていったのは、他者がいて、自分とは異なる他者たちとの関係性において社会が存在しているという感覚そのものの喪失であった。(吉見 2009: 109)

これらの指摘は、都市化度合いや人口規模ごとの社会的心理的違いとしてだけでなく、同類結合化や偶然の接触が少ない生活と、心理的な内閉性との関連と考えることができる。パウマンの指摘と、日本における指摘に共通しているのは、小さな単位の地区ごとの断片性と、人間関係の閉鎖性・異質な他者への想像力の欠如との結びつきである。デランティは、都市の閉鎖的な人間関係の背景について、次のように言及している。

300万人以上のアメリカ人が暮らすこれらの防備されたゲート付きコミュニティは、文字通り閉ざされた、警備員やゲート付きの要塞化された飛び地で

あって、その中には一種の私的なコミュニティが存在する。これらの防備されたゾーンの外側には、都市コミュニティの空間的断片化を強調するショッピングモールなど、その他の「島々」が点在している（Delanty 2003=2006: 86）。

以上を踏まえれば、都市化や技術革新を受けた人間関係の選択性の増加・非意図的な接触の減少は、下位文化内部や同階層での同類結合と、仲間内での閉鎖的な意識を招くのではないか、その背景には空間という変数があるのではないか、という可能性が指摘できる。石田（2015）は、量的調査をもとに、郊外という空間の特徴と、他者への信頼感やつきあいを指すソーシャル・キャピタルの関係について、以下のように指摘する。

ここで注意して欲しいのは、郊外開発の“固有の居住形態や階層に属する人びとの集住を促す”という特性である。近所づきあいや信頼感、互酬性が居住形態や階層に規定されるならば、居住形態や階層により住民を区分けた街並みは、結果としてソーシャル・キャピタルの地理的不均衡を生み出す。（石田 2015: 203）

選択的な同類結合が人間関係の中心になること自体は問題とは言えないし、親密な関係の多寡は、地域間での差を示さない。しかし、都市化や技術の変化に伴い、非意図的な接触が減少し、選択的な結合以外の関係が減少することが、選択されない人々を生む可能性は残っている。そして、自治体レベルの都市間比較では検出されない、何らかの場所的特性をもつマイクロな地区の内部、あるいは純粋な関係性の内部では、異質な他者との接触の機会の差に応じて、関係が内閉化することも考えられる。

断片化や内閉化の象徴のひとつとしてジェイコブス、セネット、バウマンやデランティが一樣に挙げているのが、計画的に棲み分けされた大型商業施設あるいはショッピングモールであったことも注目に値する。

ウェルマンによるコミュニティ解放論や実証研究では、全体の傾向として、都市では場所に縛られず、見知らぬ他者と新たな関係を構築がすることが容易となっていることが示されているが、フィッシャーの研究では、それが同類的な他者の選択となること、異質な他者への信頼を伴うとは言えないことも指摘されていた。

同類的な人間関係形成の背景には、異質な他者とのコミュニケーションにはリスクがあり、それを避けるという思考の傾向があるとの議論がある。内側に向かって閉じる人間関係を問題にするうえで、異質な他者とのコミュニケーションの可能性を探ることは欠かせない。高橋勇悦編(2007)では、下記のように、異質な他者とのコミュニケーション成立の前提を信頼に求めている(ただし、引用部における同質的な共同体とは、村落的・場所的な同質性であり、本人の選択傾向による同類結合とは異なる意味である)。

コミュニケーションの成立の前提となる人格的信頼は、コミュニケーションを開始する時点においてすでに先取的に成立している。しかも、この根拠をコミュニケーションの内部に求めることは不可能であるならば、この「先取り」を可能にする、人格的信頼の欠落の穴を埋めるものは、いったいどこからもたらされるのだろうか。このような先取りを可能にするものは一定の同質的な共同体への所属に対する信頼であったと考えられる。……機能を失っているリスクを忘却させる「仕掛け」がなければ、深く「腹を割る」ことはもちろん、自己に関するちょっとした話をする事さえ相当にリスクな行為として意識されることになるだろう。(福重清 2007: 58)⁹

3-4 本研究の視角

それでは、他者とのコミュニケーションのリスクを棚上げできるような信頼感はどこから形成されるのか。本研究ではその手掛かりを、ジェイコブス(Jacobs 1961=2010)の街路における見知らぬ人々への信頼の形成や、それを受けた石原武政(2006)の、商店街など地域における、人々の「自然」なつながりの確

認という議論に求めてみたい。信頼の要因として社会的属性や行動を挙げることは確かに一般的であるが、相互不信を社会的課題ととらえる場合、個人の外にある要因により、人々の信頼感にどのような変化が起こるのか、を探索することが重要である。

こうした視点から、先行研究でも言及される地域という要因に着目し、信頼形成のメカニズムを検討することで、個人の内面を越えた要因との接点を探る。以降ではこの問題設定を理論的にどのように位置づけられるのか、先行研究ではどこまで明らかにされているのかを検討する。

4. 信頼に関する理論および形成要因とその原理：地域的要因に着目して

以下では、信頼感に関する理論的整理を行い、関連する場所や地域といったレベルの変数、とくに人々の地域に対する態度について整理を試みる。どちらも他者との関係のひとつの基礎であることが指摘されており、単なる政策的な関心とは違った意義を見出すこともできる。なお、経済情勢など国家レベルで

⁹ この引用は、宮台の仮説を受けた議論である。宮台によれば、「西欧社会のコミュニケーション伝統」は、共同体をまたぐ普遍主義的なルールや理念を共有する「市民にたいする信頼」であり、こうした信頼を前提に、非人格的な役割への信頼を頼りにできない「見ず知らずの相手」にも、「徐々に探りを入れながら、人格的／非人格的コミュニケーションの落差を埋めていく……社交技術」の伝統である。一方の日本では、市民社会は存在せず、「役割という保護膜に守られないまま匿名的に出会ってしまうような場所でも、わたしたちは何らかの同一性の符牒をみつけて、その相手との間に無限定的な同一性を信頼してしまうのだ」として（宮台 1994: 262-263）、のちに触れる山岸の信頼・安心論と類似の議論を展開した。

その宮台は、分化した社会においても無限定的同一性を頼りにするようなコミュニケーションは「矛盾」しており、同一性のシンボルへの要求が高まって、ファシズムや世代闘争として現れたと説明する。現代ではその意味でのシンボルが失われた代わりに、「縦割りの小さなコミュニケーション集団の内部だけで通用する共通のシンボルが選択されるようになった」（宮台 1994: 263-265）。宮台は、こうした「信頼できるコミュニケーション前提」が存在せず、「異質な他者」に探りを入れ、「共通前提を探り当てる『技術』」が存在しない状況を「島宇宙化」と呼んでいる（宮台 1994: 268）。ここでの島宇宙は、セネット（Sennet 1970=1975）がいう郊外の純粋なコミュニティの小宇宙化とほとんど同じ意味であり、無前提の同一性に依拠したまま新たな他者との関係を構築する際にシンボルが機能していたという点を除けば、山岸（1998; 1999）での安心社会における機会損失と非常によく似た構図の議論である。

の信頼の形成要因も指摘されているが (cf. Jagodzinski et al. 2019)、検討の範囲外としている。

これまで検討した通り、都市化が進んでも、人々の人間関係は総体としては減少しないが、所属先を選択的に増やせる分、自分の住む場所や所属する集団への愛着など、アイデンティティが影響を受けると示唆され、地域に対する愛着自体は、政治との関連あるいは健康など個人的な問題と関連することも示唆されている (原田 2017)。ただし、地域愛着や信頼は抽象的な概念でもあり、理論的な整理が必要である。

4-1 信頼研究の枠組み

はじめに、信頼研究の系統について整理し、理論的な関心についてまとめる。その後、信頼を形成する要因を文献から検討する。

信頼研究の源流について整理した千葉 (1996) を参考にすれば、その研究の系統は2つある。①ドイチェの研究に始まる社会心理学系統と②社会学者ガーフィンケルの研究に始まるエスノメソドロロジー系統である。千葉によれば、①社会心理学系統の信頼とは、「囚人のジレンマ」などの「利己的利害を追求する複数の行為者を想定した状況下」において、「相手が協力的行動に出るであろうという信念」であり、②エスノメソドロロジー系統の信頼とは、「日常生活の基本的な慣習的行動や基礎的ルールを相手が守るであろうという漠然とした期待」とされ、「自らもそうした行動を行ない、そうした基礎的ルールに従った出来事を産出すること」であると整理される (千葉 1996: 212)。

近年では3つ目の系統、③社会関係資本 (ソーシャル・キャピタル) としての信頼が議論されている。社会関係資本としての信頼研究は、政治学・社会学 (特にコールマンの数理社会学) から発展¹⁰してきたが、①社会心理学の影響を受けた信頼概念を用いている¹¹。ただし、①・②のように信頼を具体的な行動や行為のレベルで検討しようとする研究とは焦点の置き方が異なる。社会関係資本研究での信頼とは、「集合的資源」あるいは「行為者間」・「個人と集団間」の関係性としての信頼性であり、これらの研究では集合レベルでの信頼が

民主主義や教育に対する資本としての機能を持つ「社会関係資本」として着目されてきた（河田潤一 2015: 29）。

信頼には以上のような系統の研究があるが、これまで社会学分野では、ジンメル、ルーマンやギデنزを中心に理論的検討がなされ、①・②にまたがる研究がおこなわれてきた。千葉（1996）によれば、社会学分野における代表的な信頼研究のうち、ルーマンは機能分析の立場から、両系統でいう信頼を「敏感」に区別して定義し（「信頼」と「慣れ親しみ」の区別が、おおむね①、②それぞれの信頼に該当）、ギデنزのハイ・モダニティ論での信頼は②の定義に近いという。社会学分野の社会関係資本研究も多くあるが、信頼の研究との接点は少ない。

社会心理学では当然①の問題意識が受け継がれ、信頼形成のメカニズムとしては山岸俊男の研究が多く参照される。③の社会関係資本として信頼を捉える研究では、政治学分野のパットナム（Putnam 1993=2001; 2000=2006）の影響を中心に、①社会心理学的な研究とも合わせて検討されている。

4-1-1 本研究でいう信頼の位置づけ

こうした議論に本研究の関心はどう位置づけられるか。本研究の関心は、あくまでも個々人の態度にある。したがって、信頼は他者に対する心理的な態度や意識を指し、日常生活の相互行為におけるルールの維持という視点を直接的には含んでいない。その意味で②エスノメソドロジー系統の信頼とは異なる概

¹⁰ パットナム（Putnam 2000=2006）によれば、1916年のハニファンの論文が Social Capital という概念の最初の使用例とみなされ、ジェイコブス（Jacobs 1961=2010）も初期の社会関係資本研究に位置づけられる。社会関係資本研究の系統については佐藤誠（2003）の整理が詳しい。佐藤によれば、「社会科学の幅広い分野におけるソーシャル・キャピタル論の興隆をもたらした最大の貢献者」としてのパットナムも、「パットナムはコールマンを基本的に受け継ぎながら、ソーシャル・キャピタルを信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴から把握する」（佐藤誠 2003: 3-4; パットナム自身の定義は Putnam 1993=2001: 206-207; 2000=2006: 14-15）

¹¹ 先述の千葉（1996）では、「合理的選択理論や数理社会学は前者〔引用者注：社会心理学〕に近い形でこの概念を用いている」としている。

念と考え、以下では①社会心理学的な信頼研究の影響を受けた社会学・社会心理学・社会関係資本研究の代表的な先行研究を中心に検討し、さらに位置づけを議論する。

まず社会学分野の信頼研究を検討するが、社会学理論の分野では、ルーマンによる信頼の分類は参考になる。ルーマンは、広義の信頼を「他者への期待を当てにすること」とし、未分化な社会秩序から分化した社会秩序への変化に伴う信頼の変化を議論の対象とする (Luhmann [1968]1973=1990:1, 37, 87, 90)¹²。そしてその信頼は、社会的複雑性の縮減の機能をもつ (同: 96)。ルーマンは、社会 (秩序) の分化の程度に応じて信頼を広範な意味で用いているが、信頼の対象によって人格的信頼と社会システムへの信頼を分けている (同: 37)。本研究の対象は他者に対する態度や意識であるから、ルーマンのいう人格的信頼がそれにあたる。

ただし、ルーマンの研究と本研究には距離がある。第1に、ルーマンは個人的な面識を持たないような「人格システム」への信頼という類型も立てて議論しているが、とくに人格的信頼との峻別が難しい。第2に、研究視角が社会的な複雑性を縮減する機能についての分析であることから、必ずしも他者に対する態度、他者との関係構築のみにとどまらない、広範な信頼研究であって、質問調査の設計とも大きな距離がある。そのため、人格的信頼をより限定的にとらえた研究が本研究にとっては重要である。

社会学理論においては、前述のように、ギデンズも議論を展開していた。その信頼は②のエスノメソドロジータ的信頼に近いとされ、本研究の研究対象とする信頼とはずれがある。ギデンズの定義では「信頼とは、所与の一連の結果や出来事に関して人やシステムを頼りにすることができるという確信」であり、ここでいう確信とは「相手の誠実さや好意、あるいは抽象的原理 (専門技術的知識)

¹² この変化について、ルーマンの記述のみでは、同時代の未分化な社会秩序と分化した社会秩序の間での違いなのか、近代化等の通時的な違いなのかは必ずしも読み取れない。この点について酒井・高 (2018) はルーマンの信頼の類型とその背景にある機能分化の構図が明示されていないことを指摘し、機能分化が進む人類史的な変化における信頼の変化として解釈している (酒井・高 2018: 99-101)。

の正しさにたいする信仰を示す」ことである (Giddens 1990=1993: 50)。ギデンズのいう信頼は、「存在論的安心感の基盤」であって、幼児期の「基本的信頼」は、独我論的な不安に対する「予防接種」である (同: 117-119)。ギデンズの信頼は他者との関係構築という特定の場面を意味してはいないのである¹³。ギデンズの信頼とは純粋な関係やアイデンティティ、心理学的には道具的/情緒的ソーシャル・サポートの受容や首尾一貫感覚にも関わる変数であり、その変数がマクロでの後期近代化とどのように関連するかという議論と要約できる。本研究の背景には密接に関係しているが、議論の対象とする信頼とは異なる概念といえる。

次に、社会心理学における信頼を検討する。社会心理学の研究では、他者の「信頼性 (trustworthiness)」に対する推定値としての「信頼感」が、個別・カテゴリー・一般という推定対象ごとに、実験・調査を用いて研究されてきたという (与謝野ほか 2016: 11-21)¹⁴。とくに山岸 (1998) は社会心理学の内外で信頼感に関する「重要な理論的基礎」とされる研究であり (与謝野・林 2005: 58)、ルーマンとも類似した問題意識に立っている¹⁵。類似しているのは、社会的な信頼の機能を対象としている点で、異なるのは、他者に対する信頼感の議論に限定されていることであろう。

山岸の議論の主題は、「関係拡張」の基盤となる信頼感であり、「相手の意図に対する期待」のうち、「他者がどの程度信頼できる人格の持ち主であるか……他に判断材料がないときに用いる」デフォルト値としての一般的信頼感にある

¹³ ギデンズも、ルーマンの分類を念頭に、システムと人格について議論を行っている。抽象的なシステム信頼は、日常生活の信憑性という安心をもたらすが、対人的な信頼関係のもたらす関係の相互性や、親密な関係性をもたらすことはいずれもできない (Giddens 1990=1993: 143)。抽象的システムと私生活の親密な関係性は対照的なものではなく、深く関わり合うが (同: 150)、当事者たちが取り組むべき個人々の課題として人格レベルでの信頼が位置づけられている (同: 151)。

¹⁴ 山岸 (1998) の信頼感 (信頼) と信頼性の区別、あるいは「一般的信頼と人格的信頼とは情報の範囲が異なっている」という情報依存性の違いを踏まえたものと考えられる (山岸 1998: 42-47)。与謝野は、「これまでの信頼研究が想定してきたような純粋な意味での一般的信頼は存在せず、一般的信頼は他者一般として想定される人々・集団に対するカテゴリー的信頼の一類型である」 (与謝野ほか 2016: 33) としている。

(山岸 1998: 4-42)。その議論は、「相手に裏切りの誘因が存在し、相手が裏切るかどうかにより自分の行動を変える必要」がある、「社会的不確実状況」を想定する(清成透子・山岸 1996: 56)。問題は、そうした場面において一般的信頼感を失い、「社会的不確実性を避けるために固定したコミットメント関係に閉じこもる傾向を強め」ることである。そうした傾向が強まれば、「ほかの人々にとっての関係外部での機会を減少させること」になり、「このような状況で人々は、特定の相手ないし集団との関係を重視し、固定した関係にある内集団の成員に対しては協力的な行動をとるが、外集団の成員に対しては不信感を示し、搾取的な行動をとる」ことになる(同: 63-64)。この「自分を搾取する行動をとる誘因が相手に存在していないと判断することから生まれる」期待を、山岸は安心と呼び、信頼と区別している(山岸 1998: 47)。一般的信頼感の低さと内集団びいき、あるいは「純粋なアイデンティティ」や「純粋なコミュニティ」の同質性と排他性(Sennett 1970=1975)、「島宇宙」(宮台 1994; 1997)、「内側に向かって閉じる」(広井 2009)という人間関係の内閉性と一般的信頼感の低さとの関連も推察できる。

山岸の議論については近年批判的に検討が進んでいるが、この議論を受け入れれば、一般的信頼感を規定する社会的要因とは何か、という問いが重要になってくる。

¹⁵ 山岸自身はルーマンの議論を批判し、明確に区別しているが、ルーマンの信頼論の関係は類似している点も多いという。この点については酒井・高(2018)に詳しく、山岸(1998)あるいは(1999)における、山岸のルーマン解釈の誤りが指摘されている。

本題からやや逸れるが、山岸は先行研究が安心(すなわちコミットメントの強化による裏切りの防止)と信頼を厳密に区別してこなかったことを批判している。しかしルーマンもサンクションによる複雑性の縮減を法の機能として述べ、信頼とは区別し、社会の分化につれてサンクションによる機能と、信頼による複雑性の縮減の機能が分離するとしている(Luhmann [1968]1973=1990: 90)。ただし、ルーマンは慣れ親しみと人格的信頼を排他的なものとはとらえていない。

なお、ルーマンの信頼の議論は社会学では一般的ではないという(酒井・高 2018)。代表的なのはギデンズのいう安心と信頼であるが、山岸のいう安心と信頼はかなり異なった概念である。山岸の言う安心は、むしろ社会学では監視として議論される状況に近い(ジンメル、ギデンズ、ルーマンの信頼論比較については三上(2008)を参照)。

次に、③の「集合的資源」あるいは「行為者間」・「個人と集団間」の「関係性」としての信頼（河田 2015: 29）を対象とする社会関係資本研究について検討する。社会関係資本としての信頼への言及は、ジェイコブスが最初期であるが、研究の枠組みとしてはパットナムの議論が最も中心的である（佐藤誠 2003; 河田 2015）。パットナムのいう社会関係資本としての信頼は、集合レベルであり、「単なる信頼ではなく、信頼性が鍵となる要因」である（Putnam 2000=2006: 158）。社会関係資本としての信頼論は、ある社会において、個々の人がもつ他者への信頼感が高い場合、その社会において信頼性が高い人が多いものとして捉え（与謝野 2016: 22）、その意味での信頼性の高さが何らかのパフォーマンスを生むという枠組みの議論である。

そして信頼の内容は、制度・システムへの信頼とは区別され、架橋的な「薄い信頼」や結束的な「厚い信頼」として議論される（Putnam 2000=2006: 159-161）。厚い信頼は山岸がいう安心（=コミットメント関係における期待）と近い概念だが¹⁶、「薄い信頼」は、山岸のいう一般的信頼尺度を用いて検討されることが多く、実質的な差異は小さい。ただし、社会関係資本の定義上、他者あるいは集団の信頼性と個々人の信頼感の関係が不明確であり（与謝野 2016: 22）¹⁷、社会関係資本の要素とされる規範や社会的ネットワークとの関係には多くの議論がある（稲葉ほか編 2011: 3-7）。本研究は、信頼の機能や信頼性を主題としていないため、社会関係資本という概念は用いず、信頼感のみを対象とする。

¹⁶ パットナムは、薄い信頼と厚い信頼の区別について、山岸俊男ら（Yamagishi=Yamagishi 1994）のいう「『信頼』と『コミットメント』の間の区別に近い（が同一ではない）」とし、厚い信頼と薄い信頼は「連続体の両端を表す」理念型として用いている（Putnam 2000=2006: 638）。

¹⁷ パットナムは最近の研究でも、「大半の人は信頼できる」か、「人付き合いでは注意しすぎということはない」という信頼感の高低を信頼性として解釈している。出会った「貧しい子ども」と「恵まれた子ども」に尋ねた場合、貧しい子どもは注意しすぎということはない、と答えることを指して「このような比較結果が反映しているのは、貧しい子どもの方が被害妄想を抱いているということではなく、むしろ彼らの生活のうちにある悪意ある社会的現実や、人々や諸制度が彼らを頻繁に裏切ってきたという事実である」としている。つまり、信頼感を信頼性として解釈している（Putnam 2015=2017: 248）。

以上の枠組みをふまえて信頼感の規定要因とその形成メカニズムという観点から、近年の先行研究について検討する¹⁸。ジェイコブスは、「街頭で交わす数多くのささやかなふれあい」が「街路全体の信頼」を形成し、これら「地元レベルの何気ない市民交流の総和」が「何気ない市民の信頼」を形成すると指摘していた。先行研究では、地域的要因による信頼感に対する影響はどこまで明らかにされているのか。

4-1-2 他者との交流による信頼生成のメカニズム

信頼についての研究は、信頼の役割や文化差の議論が中心であり、社会心理学的な研究においては「具体的にどのような社会的環境が、信頼構築を促進するかについての研究は少ない。実験研究に限ればほとんどないだろう」とされ(渡部幹・加藤隆弘 2015: 140)、社会関係資本としての信頼研究においても「どのような社会的条件のもと、どのようなメカニズムで個人の一般的信頼が醸成されるのかということについては多くが明らかにされているとは言い難い」(金澤 2008: 47)とされている。

その中でも、社会心理学での重要な理論とされる山岸(1998)では、信頼感の生成過程の理論的説明が示され、①信頼性への還元アプローチと②信頼の解き放ち理論の2つのうち、解き放ち理論の説明が妥当であるとされる。やや長くなるが以下で議論を要約する。

まず①信頼性への還元とは、「ある人間の信頼が高い(他人を信頼する傾向が強い)のは、まわりに信頼に値する行動をとる人々のいる環境で育ったから」という説明のことであり、信頼感が最終的に「周りの人々の信頼性の説明に還元される」心理学的アプローチのことである(同: 59)。

しかし、それでは信頼性情報がない他者への信頼感を説明できず、「他者一般を信頼する高信頼者」が「他者の信頼性情報に敏感である」ことも説明できない。こうした問題を説明できるのが②解き放ち理論であり、他人に騙されかね

¹⁸ 信頼感以外の社会関係資本の規程要因については「年齢、収入、婚姻状況、居住形態、教育水準などがSCの蓄積に正の影響」を与えるとされる(覃子懿・田中勝也 2017)。

ない不確実性下でのみ他者への信頼感が必要で、不確実性に対して「安定したコミットメント関係」を形成してお互いに監視しあう場合には「相手が信頼できるかどうかを心配する必要がない」（同：76）。だが、このようなコミットメント関係では機会コストを生み出すために、コストが大きくなると関係から離脱し、新たな機会を得た方が大きな利益を得る可能性が高い。山岸は、こうした場面で「他者一般に対する信頼が人々を固定した関係の呪縛から解放する役割を果たし、したがって機会コストの大きな社会的環境のもとでは一般的信頼をもつことが結果として本人に利益をもたらす可能性のあること」を信頼の解き放ち理論と呼んでいる（同：89）。そして、コミットメント関係の重要性がより高い（＝関係流動性の低い）日本社会では、アメリカ社会に比して、人々の一般的信頼感が低いことが質問紙調査や行動レベルでの実験によって示されているのである¹⁹。

その後の研究では解き放ち理論自体が批判され、「個々人が一般的信頼をいかに獲得するのかという内的プロセスの記述を全く欠いている」という指摘や（辻 2005: 43）、「実験室状況を超えた実際の社会状況」に適用できないという指摘（鈴木努 2006: 564）、補完的に「つまり『解き放ち理論』では、他者との関係構築を試行錯誤することで信頼性を見極め能力が磨かれてコミットメント関係から離脱可能となり、再び新たな他者との関係構築を試みる中で信頼感がより高められるという循環的過程を想定していると考えられる」として解釈する研究などがある（稲垣 2009: 94）。こうした理論的・実証的検証によって、都市部と村落部での個々人の一般的信頼感に違いは見られず、都市化により社会関係が分化した場と分化していない場では一般的信頼感の形成メカニズムが異なり、前者では解き放ち理論に近いメカニズム・後者では信頼性への還元に近いメカニズムによって信頼感が生成されること（林直保子 2004; 与謝野・

¹⁹ 先述の桜井が指摘するように、近年の調査で日本とアメリカ等の他国との比較において、人々を信頼できるか、という類の質問の回答では差がなくなっているとするデータもある。しかしながら、ボランティア活動は見知った人々や地縁関連のものが主流であり、見知らぬ他人を助けるという日本人は依然として他国に比して少なく（桜井 2020）、一般的信頼感を取り巻く状況は変わっていないと考えられる。

林 2005; 稲垣 2009)、ある年齢までは身近な人への信頼感が一般的信頼感につながる、すなわち信頼性のある身近な人とのかかわりによって一般的信頼感が形成されること(信頼性への還元)が示されている(辻・針原素子 2010)。

4-1-3 信頼感の規定要因：社会心理学における指摘

具体的に生成過程の議論や規定要因を検討しよう。敷島・平石・安藤は、最も根本的な遺伝・個人的環境・社会環境の比較から規定要因を検討している。それによれば、一般的信頼に及ぼす遺伝による相対的影響力は存在するものの、個人の環境による影響力より小さい可能性が高く、その環境としては「家族成員によって共有される環境は影響を及ぼさなかった。主要因となるのはむしろ非共有環境、すなわち個人個人が経験する家庭外の環境であった」と結論している(敷島・平石・安藤 2006: 54)。

その社会環境について、林は、機会費用や社会関係が異なる4自治体²⁰を選んで調査票調査を行い、多変量解析を行った。そこでは地域ごとに個人個人の一般的信頼の違いは見られず、一般的信頼を従属変数とした重回帰分析の結果でも、性別・年齢から教育年数・収入・居住年数・近隣ネットワーク等の寄与はなく、地域参加度が正の効果をもつのみであり、決定係数は低いという還元アプローチに近い結果であった。さらなるクラスタ分析では教育年数や年収という「社会的機会を多くもつ高階層」でかつ「地域やネットワーク」に埋め込まれていない(地域参加をせず、近隣の知人が少ない)人々は、一般的信頼が低い。さらに、社会階層に関係なく「地域参加および近隣ネットワークが欠如している層において、一般的信頼が低」く、「高い地域参加度と親密な近隣ネットワークをもつ層において相対的に信頼が高い」という結果であり、「還元アプローチのプロセス」が示唆されている(林 2004: 10-14)。

与謝野・林は、同じ調査から交互作用に着目した分析を行う。それによれば、自治体ごとに信頼生成の過程が異なり、都市的な自治体では「『収入が高く居住

²⁰ 職業構成や持ち家比率、世帯人数などが異なることを基準としている。

年数が短い』、あるいは『収入が高く、近隣との付き合いが少ない』場合に、高い信頼感が生成」され、解き放ち理論が当てはまる。対して伝統的地域社会では「居住年数が長いもの、あるいは、近隣との交流が多いものが高い一般的信頼感を抱いている」という還元アプローチの説明が当てはまるという（与謝野・林 2005: 69）²¹。

与謝野・林のその後の研究では、「見知ったひとびととのつながり、期待が、見知らぬ他者への信頼の基礎となること」、それを「近隣への共感が、他者一般への共感の基礎となるという解釈ができる」（与謝野・林 2007: 101）ことも示され、近年では信頼感の範囲、マクロレベルの格差の影響が検討されている（与謝野・林 2010）。

4-1-4 信頼感の規定要因：社会関係資本研究における指摘

近年の研究では相互参照が多いため、個々人の信頼感を社会関係資本として分類する研究が多くあり、系統の区別は難しい。社会関係資本研究と称する議論でも、結果的には近い指摘が行われてきた。

小藪明生は、（解き放ち理論とは対照的に）「基礎的な集団の安定性やそこでの知識や規範の共有が信頼形成の土台になることは、多くの論者が共通して指摘」しており、しかし「そこに埋没するのではなく、開放的な集団に参加したり、集団間を架橋する水平的で幅広い関係を構築することで、〔引用者注：個々人の〕一般的な他者に対する信頼感が醸成されるというメカニズムが、ソーシャル・キャピタル論において想定されている」とする（小藪 2018: 44-46）^{22, 23}。

²¹ 鈴木努（2006）はこの結果を3変数の4次関数のモデルによって統一的に説明する理論化を行う。

²² パットナム（Putnam 2000=2006）が示唆していた厚い信頼と薄い信頼の連続性にあたる。

²³ この研究に先立ち、小藪明生・濱野強・藤澤由和は、2000～2003年の全国調査を、不信/一般的信頼を従属変数とするロジスティック回帰分析によって分析し、女性ダミー・学歴・世帯収入・読書冊数には正の影響力が、テレビ視聴時間・トラウマ経験回数には負の影響力があることを示したが、他者との交流と信頼の関係の考察はなされていない（小藪・濱野・藤澤 2007）

実際に金澤悠介も、2003年の全国調査から、地域内の「既存のネットワークへの愛着」や「異質な他者との接触」を独立変数として、条件付き信頼²⁴と一般的信頼の生成過程を多項ロジスティック回帰分析によって検討している。統制変数としては、任意団体への加入、基本属性（年齢・性別・教育年数・世帯収入・職種・居住年数）、治安・中小都市/町村ダミーの影響を考慮している。分析結果では、地域に対する愛着（信頼感）の高さが不信から条件付き信頼を生成し、地域愛着と外国人と近所で会う頻度の双方が条件付き信頼から一般的信頼を生成することが示唆され、「個人が一般的信頼を発達させるためにはある程度緊密でありながら、その成員に異質性があるという社会的ネットワークに埋め込まれる必要がある」としている（金澤 2008: 59）。他の統制変数では、不信から条件付き信頼への変化には、事務・営業ダミーが、条件付き信頼感から一般的信頼感への変化には、世帯収入が有意に正の影響をもっていた。

小藪も、2013年の全国調査の分析で、頼れる人や組織²⁵の種類を信頼の範囲と解釈し、家族>友人・知人≥親戚>職場の同僚≥近所の人々の順に信頼する人が減ってゆくことを指して「信頼の範囲は、より親密な集団、結合型の関係性をステップにして広がるという傾向、およびそのようにして広がった信頼の範囲が、ソーシャル・キャピタル論が示唆するような諸変数との関連性を持ち、地域レベルの変数としても有効である」と結論している（小藪 2018: 55）。個々人の一般的信頼感や信頼の範囲の規定要因の分析も行われており、一般的信頼感に対しては、女性ダミー・年齢・世帯収入が正の影響をもち、都市規模ダミーは負の影響をもっていた。信頼の範囲では、性別が関連しないほか、「地域活動量」が正の影響をもっていた。こうした研究によって、地域への愛着ないし内集団への信頼感、地域活動と、一般的信頼感との関係が示唆されてきた

²⁴「一般的に、人は信用できると思いますか」に対し、「場合による」と答えることを指す。

²⁵「(健康・老後・子育てなど) 日常生活の問題や心配事について、あなたには、相談したり頼ったりする人や組織がありますか」という質問項目のうち、範囲の対象として「近所の人々」・「家族」・「親戚」・「友人・知人」・「職場の同僚」の五項目を用いて、信頼感の対象の範囲の広がりを検討している（小藪 2018: 48）。

といえる。

以上のような社会心理学や社会関係資本論における研究に比べ、稲垣は、インターネットを通じたパネル調査の分析を行い、因果関係の詳細な検討を行った。分析では「継時データ分析および構造方程式モデルからは、居住地域への信頼が一般的信頼の生成に大きく影響していることを示す結果が得られ……地域内の交流を基礎とした2段階の信頼生成過程が作動していることを示唆する変数間の関係がみられた」²⁶ことを示した（稲垣 2013: 85）。すなわち、「分析結果は、2段階の一般的信頼生成過程が存在しており、地域コミュニティの関係を基盤として一般的信頼が生成されていることを示唆」²⁷し、こうした「特定の対象との関係に基礎を置きつつ、そこから信頼を拡充していくという過程は、発達心理学における信頼生成理論とも整合的である」と解釈している²⁸（同：80-81）。

ここで示された信頼形成の過程を踏まえれば、ジェイコブスが指摘した信頼には段階があり、街路における信頼は市民的信頼とは区別されるものと理解できる。ただし、以上の地域内の信頼に言及する研究に対する重要な注意点として、地域に対する愛着と地域内の他者への信頼とは区別されていないという問題がある。

²⁶ 稲垣（2013）での統制変数は性別、年齢、居住年数、教育年数、世帯収入である。

²⁷ 2段階の過程とは、金澤（2008）という複合型仮説であり、「①信頼する技術を訓練する場として、地域コミュニティの関係のように限定的な不確実性を伴う人間関係があり、そこで他者を信頼する術の基礎を身につける。②見知らぬ人々と交流する過程をとおして、信頼性を見極め能力に磨きをかけ一般的信頼を獲得する、という2段階の過程」の仮説のことである。村落部と都市部での違いについては、「都市部では既に多くの人々が前述した過程の②段階目に完全に移行していた一方、村落部では①から②の過程へと移行している途中の段階にあったため、あたかも村落部にのみ2段階の信頼生成過程が存在しているかのようにみえたのだと考えられる」としている（稲垣 2013: 82）。

²⁸ 稲垣のいう地域信頼とは、「私の住んでいる地域に愛着を感じる」「私の住んでいる地域の人々は気軽にあいさつし合う」「私の住んでいる地域の人々は信頼できる」という項目の平均値をとり合成したものである（Cronbach's $\alpha = .82$ ）。一般的信頼（「私は人を信頼するほうである」「ほとんどの人は信頼できる」「ほとんどの人は基本的に善良で親切である」）とは因子分析によって区別されている（因子間相関： $r = .59$ ）（稲垣 2013: 65）。

4-1-5 信頼感の規定要因：地域レベルの変数

社会関係資本と地域に関する研究では、社会心理学とは違った文脈で、地域レベルの変数が扱われている。私見の限り、信頼を含む社会関係資本に対する、地域的な規定要因の最もまとまった日本の研究は、地理学における埴淵知哉編(2018)である。集計単位の細分化(町丁目)や、地域の境界の意味にまで踏み込んだ考察を行っているが、中でも重要なのが、人口規模以外の地理的特性による社会関係資本に対する影響の指摘である。それによれば、集合レベルを含めた社会関係資本一般に対する規定要因として、都市化/郊外化²⁹、歩きやすさ(Walkability)、開発時期、歴史的経緯の5つを挙げる。地域における歩きやすさという指標は、本研究が着目するミクロな場所的特性・都市環境の物理的レイアウトであり、ジェイコブスや地域的要因とも関連しうる。分析では、町丁目単位で、人口密度・道路密度・商業集積/公園へのアクセスなどを指標とし、社会関係資本との関連が検討されている。愛知県における調査・インターネット調査を用いて分析し、都市化度や基本的な属性を統制すると、歩きやすい地域の住民ほど近隣住民に対する信頼感や近所付き合いの諸側面において、予測とは反対に「社会関係資本が乏しい結果」であるという(埴淵編 2018: 85)。この結果をどのように理解するのかについての理論的な説明は十分でないが、結論は、「都市化度と開発時期、つまり『都市—農村』と『過去—現在』という空間および時間軸上」の場所的特性が、地域内信頼やつきあいなどのローカルな社会関係資本に影響を及ぼし、都心—郊外という比較軸は有効でないというものである(埴淵編 2018: 99)。

さらに、先述した石田の研究も、町丁目レベルでの郊外開発と社会関係資本(一般的信頼を含む数指標)の関係について分析しているが、埴淵編(2018)とは違った考察を行う(ただし、地区レベルの変数はダミー変数であり、マルチ

²⁹ 都市化/郊外化と社会関係資本に関する検証では、既存全国調査をもとにしているため信頼感の検証は不十分とされているが、基本属性を統制しても、都市化度ごとに地域内でのサポート期待(「近所の方は、私が困っていたら手助けしてくれる」:近隣住民に対する信頼感と解釈されている)には有意差があり、非都市圏ほど高いが、中心—郊外の差はないという(埴淵編 2018: 76-77)。

レベル分析ではない)。分析結果によれば、「地域は諸個人のソーシャル・キャピタルにほとんど影響を及ぼさない」こと、「信頼性と互酬性の分析結果は近所づきあいと反対」であり、「〔引用者注：階層以外の〕属性や居住形態の効果は見られない一方で、階層変数が強い規定力をもっている。すなわち、教育を長く受け、世帯収入の多い人ほど一般的信頼、努力への信頼、互酬性が高い」という（石田 2015: 200-202）。この結果を見れば、郊外開発の影響はないように見え、埴淵編の結論とも類似している。しかし、石田は個人属性と場所的特性の結びつきを以下のように考察していた。

ここで注意して欲しいのは、郊外開発の“固有の居住形態や階層に属する人びとの集住を促す”という特性である。近所づきあいや信頼感、互酬性が居住形態や階層に規定されるならば、居住形態や階層により住民を区分けた街並みは、結果としてソーシャル・キャピタルの地理的不均衡を生み出す。（石田 2015 202-203）

これに対し、高木・辻・池田は、物理的な空間ではなく、街区単位の社会関係資本の効果や生態学的誤謬を検討し、マイクロレベルの信頼・ネットワークが集積することでマクロレベルの信頼³⁰・ネットワークが生まれ、こうした2つのレベルの社会関係資本が協力行動や犯罪被害件数にどのような影響を与えるかを分析している。

この研究は、信頼生成についての分析は主題ではないが、示唆的なのは、「個人レベルでの効果は有意ではなかったものの、街区レベルで『挨拶や立ち話をする知人』の数が多いほど協力行動が促進される」という結果である（高木・辻・池田 2010: 43）。これまでの信頼形成過程の議論は、いずれも集合効果を扱ったものではなく、住む地域全体の特徴が個人の意味とは無関係に効果を及

³⁰ ただし、指標は個々人の一般的信頼感の平均値であるため、信頼性と信頼感の区別は厳密でないが、従属変数に対する影響力という性質は区別できることが示されている。

表1：先行研究のまとめ——信頼感はどのような地域的要因により形成されるか

林 (2004) 地域参加度の高さ ※性別、年齢、教育年数、収入、居住年数、近隣ネットワークは効果なし	
与謝野・林 (2005) 【都市部】収入の高さ、居住年数の短さ、近所付き合いの少なさ 【村落部】居住年数の長さ、近所付き合いの多さ	一般的信頼感
与謝野・林 (2007) 見知った人々とのつながり、期待の多さ	
金澤 (2008) 地域に対する愛着 (信頼感) の高さ、事務・営業ダミー	不信から条件付き信頼への変化
金澤 (2008) 地域に対する愛着 (信頼感)、外国人と近所で会う頻度、世帯収入、の高さ	条件付き信頼から一般的信頼への変化
高木・辻・池田 (2010) (集合レベルのみ) あいさつや立ち話をする知人の多さ	協力行動
稲垣 (2013) 居住地域への信頼の高さ	
小藪 (2018) 女性ダミー・年齢の高さ・世帯収入の多さ ※都市規模ダミーは負の効果	一般的信頼感
小藪 (2018) 地域活動量の多さ、都市規模の小ささ (ダミー変数) ※性別は関連しない	信頼の範囲
埴淵知哉編 (2018) 都市化/郊外化、開発時期、歴史的経緯 ※歩きやすさ (Walkability) は効果なし	地域内信頼、近所付き合い、一般的信頼感 (集合レベル)
石田 (2015) 教育年数の長さ・世帯収入の多さ ※近所付き合い、居住形態は効果なし	努力への信頼・一般的信頼感、互酬性

ばす可能性を示している。以上のレビュー結果をまとめたのが表1である。

5. 結論

最後に、先行研究における課題を指摘する。これまでの信頼研究では、とく

に稲垣（2013）をはじめとした地域レベルでの信頼感や愛着が一般的信頼感に結び付くという議論が有力で、そして埴淵、石田や高木による、場所的特性、地域に対する態度と信頼感や協力行動との関係の議論では、いずれも地域に対する意識・態度や対人行動が焦点のひとつであった（表1を参照、地域的要因への言及は太字部分）。

これらの研究では、扱う場所的特性が個人的な内容に偏っている傾向がある。多くは人々の地域に関わる態度と信頼という態度との関係、あるいは地域に関わる行動と態度との関係を問うものであり、地域での外的な要因、例えば市町村や町丁目レベルでの変数などによる影響が考慮されておらず、個人的な変数に集中したものがほとんどである。社会の共通基盤を問題とする場合、個々人の態度が外的な要因によってどのような影響をうけるのかは重要な課題であるが、現在の研究では焦点化されておらず、場所的特性と社会生活の関係を課題としてきた都市社会学の研究（cf. 原田 2017）も一部しか活かされていない。

さらに、一般的信頼感の規定要因として、カテゴリー的な信頼感、とくに地域的な信頼感を挙げる研究では、地域に関わる態度についての研究——地域社会学や心理学における、コミュニティ意識やコミュニティ・モラルといった態度に関する研究（鈴木広 1978: 小林久高・堀川 1996; 石盛 2013）——がほとんど参照されておらず、地域的信頼感、概念、地域愛着の概念間の関係が十分に議論されていない。そのため地域的信頼感という概念が空間に対する信頼を測定しているのか、それとも対人信頼感を測定しているのか、という信頼感の研究上の非常に重要な区別が不十分である。

今後はこれらの課題をふまえ、他者との共通基盤が社会的な課題であるのか、という点も問い直しながら概念的整理を行い、地域的要因との関係の実証研究を行うべきと考える。

（参考文献）

Bauman, Zygmunt (2001), "Community: Seeking safety in an insecure world."
Cambridge: Polity Press (= 2008, 奥井智之訳『コミュニティ——安全と自由の戦

- 場』筑摩書房).
- Baumeister RF., Leary, MR., (1995) "The need to belong: desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation.", *Psychological bulletin*, 117 (3): 497-529.
- Delanty, Gerard (2003) "Community", London: Routledge (=2006, 山之内靖・伊藤茂訳『コミュニティ』NTT出版).
- Dunbar, R. I. M. (1996) "Grooming, gossip, and the evolution of language", Cambridge, MA: Harvard University Press (= (1998) 松浦俊輔・服部清美『ことばの起源——猿の毛づくろい、人のゴシップ』青土社).
- Fischer, Claude S. [1976] (1984) "The Urban Experience 2nd ed." New York: Harcourt Brace and Jovanovich (= 1996, 松本康・前田尚子訳『都市の体験——都市生活の社会心理学』未来社).
- Florida, Richard (2002) "The Rise of the Creative Class: and How It's Transforming Work, Leisure, Community and Everyday Life" New York: Basic Books (= 2008, 井口典夫訳『クリエイティブ資本論——新たな経済階級の台頭』ダイヤモンド社).
- Giddens, Anthony (1990) "The consequences of modernity", Stanford University Press (= 1993, 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か——モダニティの帰結』而立書房).
- Granovetter, M. S. (1973) "The strength of weak ties.", *American Journal of Sociology*, 78: 1360-1380 (= 2006, 大岡栄美訳「弱い紐帯の強さ」野沢慎司編『リーディングス ネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房: 123-154).
- Inoguchi, Takashi (2002) "Broadening the Basis of Social Capital in Japan", Robert D. Putnam eds, *Democracies in Flux: The Evolution of Social Capital in Contemporary Society*, New York: Oxford University Press (= 2013, 猪口孝訳『流動化する民主主義——先進8カ国におけるソーシャル・キャピタル』ミネルヴァ書房).
- Jacobs, Jane (1961) "The Death and Life of Great American Cities", New York: Vintage books (= 2010, 山形浩生訳『アメリカ大都市の死と生』鹿島出版会).
- Jagodzinski, Wolfgang, Hermann Duellmer, 稲垣佑典・前田忠彦 (2019) 「変化する社会における一般的信頼——1978年から2013年の間の日本における対人的信頼の発展」『データ分析の理論と応用』8 (1) : 25-46.

- Kawachi, Ichiro and Lisa F. Berkman Maria Glymour (2014) "Social Epidemiology, 2nd ed." New York: Oxford University Press (= (2017) 高尾総司ほか訳『社会疫学〈上〈下〉』大修館書店).
- Luhmann, Niklas, [1968](1973) "Vertrauen : Ein Mechanismus der Reduktion sozialer Komplexität 2Auf", Ferdinand Enke Verlag (大庭健・正村俊之訳, 1988 『信頼——社会的な複雑性の縮減メカニズム』勁草書房).
- Park, Robert E. [1925] (1984) "The City: Suggestions for Investigation of Human Behavior in the Urban Environment." Robert E. Park and Ernest W. Burgess ed., The City: Suggestions for Investigation of Human Behavior in the Urban Environment, Chicago: University of Chicago Press. (= (2011) 松本康訳「都市——都市環境における人間行動研究のための提案」松本康編『都市社会学セレクション第1巻 近代アーバニズム』日本評論社: 39-88).
- Putnam, Robert D. eds. (2002) "Democracies in Flux: The Evolution of Social Capital in Contemporary Society.", New York: Oxford University Press (= (2013) 猪口孝訳『流動化する民主主義——先進8カ国におけるソーシャル・キャピタル』ミネルヴァ書房).
- Putnam, Robert D. (1993) "Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy", Princeton: Princeton University Press (= (2001) 河田潤一訳『哲学する民主主義——伝統と改革の市民的構造』NTT出版).
- Putnam, Robert D., 2000, "Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community", New York: Simon & Schuster (= (2006) 柴内康文訳『孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房).
- Putnam, Robert D. (2015) "OUR KIDS: The American Dream in Crisis", New York, Simon & Schuster (= 2017, 柴内康文訳『われらの子ども——米国における機会格差の拡大』創元社).
- Rook, Karen S. (1987) "Social support versus companionship: effects on life stress, loneliness, and evaluations by others", Journal of personality and social psychology, 52 (6) :1132-47.
- Sennett, Richard (1970) "The Uses of Disorder: Personal Identity and City Life", New York: Alfred A. Knopf, Inc (= (1975) 今田高俊訳『無秩序の活用——都市コミュニティの理論』).
- Wellman, Barry and Barry Leighton (1979) " Networks, Neighborhoods and

- Communities: Approaches to the Study of the Community Question”, *Urban Affairs Quarterly*, 14 (3) : 363-390 (= 2012, 野沢慎司訳「ネットワーク、近隣、コミュニティ」森岡清志編『都市社会学セレクション 2 都市空間と都市コミュニティ』日本評論社 : 89-126).
- Wuthnow, Robert (2002) “The United States: Bridging the Privileged and the Marginalized?”, Robert D. Putnam, eds., *Democracies in Flux: The Evolution of Social Capital in Contemporary Society*, New York: Oxford University Press (= (2013) 猪口孝訳『流動化する民主主義——先進8カ国におけるソーシャル・キャピタル』ミネルヴァ書房).
- Yamagishi, T., and Yamagishi, M. (1994) “Trust and commitment in the United States and Japan”. *Motivation and Emotion*, 18: 129-166.
- 三上剛史 (2008) 「信頼論の構造と変容——ジンメル、ギデンズ、ルーマン -- リスクと信頼と監視」『国際文化学研究』31: 1-23.
- 稲垣佑典 (2009) 「都市部と村落部における信頼生成過程の検討」『社会心理学研究』25 (2) : 92-102.
- 稲垣佑典 (2013) 「信頼生成過程の検討による『信頼の置き放ち理論』再考——個人と地域コミュニティとの関係性に着目して」東北大学博士論文.
- 稲垣佑典・前田忠彦 (2015) 「潜在クラス分析による「日本人の国民性調査」における信頼の意味とその時代的変遷の検討」『統計数理』63 (2) : 277-297.
- 稲葉陽二ほか編 (2011) 『ソーシャル・キャピタルのフロンティア -- その到達点と可能性』ミネルヴァ書房.
- 浦光博 (1992) 『支え合う人と人——ソーシャル・サポートの社会心理学』サイエンス社.
- 浦光博 (2009) 『セレクション社会心理学 25 排斥と受容の行動科学——社会と心が作り出す孤立』サイエンス社.
- 遠藤由美 (2006) 「自尊心が社会的排除・拒絶への反応に及ぼす効果」『関西大学社会学部紀要』37 (2) : 29-41.
- 河田潤一 (2015) 「ソーシャル・キャピタルの理論的系譜」坪郷實編『福祉 + α ソーシャル・キャピタル』ミネルヴァ書房 : 20-30.
- 吉見俊哉 (2009) 『ポスト戦後社会——シリーズ日本近現代史 (9)』岩波書店.
- 宮台真司 (1994) 『制服少女たちの選択』講談社.
- 宮台真司 (1997) 『まぼろしの郊外——成熟社会を生きる若者たちの行方』朝日新聞

社.

橋本剛 (2003) 「対人ストレスの定義と種類——レビューと仮説生成的研究による再検討」『人文論集』静岡大学人文学部 54 (1) : 21-57.

玉野和志 (2005) 『東京のローカル・コミュニティ——ある町の物語一九〇〇-八〇』東京大学出版会.

金明秀 (2015) 「日本における排外主義の規定要因——社会意識論のフレームを用いて」『フォーラム現代社会学』 14: 36-53.

金澤悠介 (2008) 「社会関係資本と一般の信頼の生成——二つの仮説の経験的検証と新たな仮説の提示」『社会学研究』 (84) : 45-68.

原田謙 (2017) 『社会的ネットワークと幸福感——計量社会学でみる人間関係』勁草書房.

広井良典 (2009) 『コミュニティを問いなおす——つながり・都市・日本社会の未来』筑摩書房.

高橋勇悦編 (2007) 『現代日本の人間関係——団塊ジュニアからのアプローチ』学文社.

高田保馬 ([1922]1971) 『社会学概論』岩波書店.

高木大資・辻竜平・池田謙一 (2010) 「地域コミュニティによる犯罪抑制——地域内の社会関係資本および協力的行動に焦点を当てて」『社会心理学研究』 26 (1) : 36-45.

佐藤誠 (2003) 「社会資本とソーシャル・キャピタル」『立命館国際研究』 16 (1) : 1-30.

坂本治也 (2010) 「日本のソーシャル・キャピタルの現状と理論的背景」『ソーシャル・キャピタルと市民参加』関西大学経済・政治研究所 : 1-31.

桜井政成 (2020) 『コミュニティの幸福論——助け合うことの社会学』明石書店.

山岸俊男 (1998) 『信頼の構造——こころと社会の進化ゲーム』東京大学出版会

山岸俊男 (1999) 『安心社会から信頼社会へ——日本型システムの行方』中央公論新社

酒井泰斗・高史明 (2018) 「行動科学とその余波——ニクラス・ルーマンの信頼論」小山虎『信頼を考える——リヴァイアサンから人工知能まで』勁草書房.

河合克義ほか, 2013, 『社会的孤立問題への挑戦——分析の視座と福祉実践』法律文化社.

小林久高・堀川尚子 (1996) 「流動層のコミュニティ意識——その現実と可能性」『ソシオロジ』 41 (2) : 55-73.

- 小林哲郎・池田謙一 (2007) 「若年層の社会化過程における携帯メール利用の効果——パーソナル・ネットワークの同質性・異質性と寛容性に注目して」『社会心理学研究』23 (1) : 82-94.
- 小藪明生 (2018) 「信頼のレベルと信頼の範囲」(佐藤嘉倫編)『ソーシャル・キャピタルと社会——社会学における研究のフロンティア』ミネルヴァ書房 : 41-59.
- 小藪明生・濱野強・藤澤由和 (2007) 「ソーシャル・キャピタル研究における一般的信頼の位置づけ」7 (1) : 60-63.
- 埴淵知哉編 (2018)『社会関係資本の地域分析』ナカニシヤ書房.
- 森岡清志 (2011) 「ソーシャル・キャピタルの集積効果」放送大学研究年報 29 (1) : 1-11.
- 清成透子・山岸俊男 (1996) 「コミットメント形成による部外者に対する信頼の低下」『実験社会心理学研究』36 (1) : 55-67.
- 西山隆行 (2020)『格差と分断のアメリカ』東京堂出版.
- 石原武政 (2006)『小売業の外部性とまちづくり』有斐閣.
- 石黒格編 (2018)『変わりゆく日本人のネットワーク——ICT普及期における社会関係の変化』勁草書房
- 石盛真徳 (2004) 「コミュニティ意識とまちづくりへの市民参加——コミュニティ意識尺度の開発を通じて」『コミュニティ心理学研究』: 7 (2) : 87-98.
- 石盛真徳 (2013) 「コミュニティ社会心理学の視点」石盛真徳・岡本卓也・加藤潤三編『コミュニティの社会心理学』ナカニシヤ書店.
- 石盛真徳・岡本卓也・加藤潤三 (2013) 「コミュニティ意識尺度 (短縮版) の開発」『実験社会心理学研究』53 (1) : 22-29.
- 石田光規 (2015)『つながりづくりの隘路——地域社会は再生するのか』勁草書房.
- 石田光規 (2018) 「人間関係の変容と孤立」佐藤嘉倫編『ソーシャル・キャピタルと社会——社会学における研究のフロンティア』ミネルヴァ書房 : 60-84.
- 赤枝尚樹 (2015)『現代日本における都市メカニズム——都市の計量社会学』ミネルヴァ書房
- 赤枝尚樹 (2018) 「親密な友人関係における同類結合とその変化」石黒格『変わりゆく日本人のネットワーク——ICT普及期における社会関係の変化』勁草書房.
- 千葉隆之 (1996) 「信頼の社会的解明に向けて」『年報社会学論集』9: 211-222.
- 中根千枝 (1967)『タテ社会の人間関係——単一社会の理論』講談社.
- 辻竜平・佐藤嘉倫編 (2014)『格差社会とソーシャルキャピタル』東京大学出版会.

- 辻竜平・針原素子（2010）「中学生の人間関係の認知・評価と一般的信頼」『理論と方法』25（1）：31-47.
- 渡部幹・加藤隆弘（2015）「信頼生成の社会的基盤と生理的基盤」『フロンティア実験社会科学 4 社会関係資本の機能と創出』ミネルヴァ書房：133-166.
- 敷島千鶴・平石界・安藤寿康（2006）「一般的信頼に及ぼす遺伝と環境の影響——行動遺伝学的・進化心理学的アプローチ」『社会心理学研究』2（2（1））：48-57.
- 福重清（2007）「変わりゆく『親しさ』と『友だち』」高橋勇悦編『現代日本の人間関係——団塊ジュニアからのアプローチ』学文社：（27-61）.
- 与謝野有紀・林直保子（2005）「不確実性、機会は信頼を育むか？——信頼生成条件のプール代数分析」『関西大学社会学部紀要』36（1）：53-73.
- 与謝野有紀・林直保子（2007）「格差、信頼、および協力」『社会変動と関西活性化』関西大学経済・政治研究所：89-112.
- 与謝野有紀・林直保子（2010）『格差と信頼』関西大学社会学部紀要 4（2（1））：77-91.
- 与謝野有紀・林直保子・草郷孝好（2016）『社会的信頼学——ポジティブネットワークが生む創発性』ナカニシヤ出版.
- 林直保子（2004）「社会関係と信頼——安心は信頼を育むのか、それとも破壊するのか」『関西大学社会学部紀要』35（2）：1-17.
- 鈴木広編（1978）『コミュニティ・モラルと社会移動の研究』アカデミア出版会：433-547.
- 鈴木春菜・藤井聡（2008a）「地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究」『土木計画学研究・論文集』25（2）：357-362.
- 鈴木春菜・藤井聡（2008b）「『消費行動』が『地域愛着』に及ぼす影響に関する研究」『土木学会論文集D』64（2）：190-200.
- 和辻哲郎（1935）『風土——人間学的考察』岩波書店.
- 櫻井龍彦（2001）「対面性の変容—近代社会における相互行為・空間・コミュニケーション」『年報社会学論集』14：200-211.
- 覃子懿・田中勝也（2017）「日本におけるソーシャル・キャピタルの規定要因——ボンディング型とブリッジング型の比較」『環境情報科学論文集』31：213-218.

（いまい りゆうた）
（2021年3月3日受理）